

「技術者倫理」をいま一度考える ～「心理学」からみた倫理の問題～

東京工業大学 藤井 聡

「倫理的」とは何か？

「技術者倫理」が、現代の土木において重要であることは、万人が認めるところであろう。「倫理的でない技術者」よりは「倫理的である技術者」のほうがいだろう、とは誰しもが素朴に感じているところである。しかし、「倫理的な技術者」とは、一体どのような技術者なのだろう。例えば、次のようなケースを考えてみよう。

私は、道路計画に強いコンサルタントのK。この度、N県Y土木事務所から道路計画を受注した。初回の打ち合わせで、Y土木事務所のT課長から「この道路はM市とU市とを結ぶ基幹道路なのだが、何としても事業化にこぎつけたいと考えていてね。よろしく頼むよ」といわれた。その後分析結果をとりまとめ、Y土木事務所に打ち合わせに行った。そして、我が社の分析担当Sが次のように説明した。「交通量推計結果に基づくと、予想交通量が少なく、B/C(費用便益比)は0.9程度にしかありません。このままでは、事業成立は難しいと思います。」この説明に対し、T課長は顔色を変えて「そんなことは分かっている。そこを何とかするのが、コンサルタントじゃないか」といった。担当者Sは交通量推計の手法や内容を説明し、それが如何に難しいことであることを説明しだした。私は技術を軽視する発注者は困ったものだと思いつつ、発注者が求める答えを出すのがコンサルタントの職務だと考え、「S君、いろいろあるが、やってみようじゃないか」と、担当者Sがそれ以上発言しようとするのを押しとどめた。(『技術は人なり』¹⁾、pp. 107-108より抜粋要約)

この時、誰が倫理的で誰が倫理的ではないのだろうか。技術に忠実に振る舞おうとした若手担当者のSが「倫理的」なのだろうか、それとも、会社の存続を危うくし、コンサルタントの職員とその家族を危機に追いやる「非倫理的」な輩なのだろうか。技術を蔑ろにしようとした上司Kは「非倫理的」なのか、それともコンサルタントの職務に忠実であろうと考えるが故に「倫理的」なのだろうか。虚偽の需要予測を強要する発注者T課長は「非倫理的」なのか、それとも現在の計画評価手法の中では評価することができない真の公益のために、是非とも国民のためにこの道路計画を実現したいと考える「倫理的」な課長なのだろうか――。

このケースはあまり深く考えなければ、「担当者Sが倫理的で、課長Tが非倫理的、その板挟みにあう上司Kは中間的だがやや非倫理的」と判断されることが多いのではなかろうか。しかし、じっくりと考えると、多様な可能性が考えられるのであり、誰が倫理的で誰が倫理的でないのか、即決することは、なかなか難しい。

本稿では、この問題について、つまり、「倫理的であるとは一体何を意味するのか」について、改めて考えてみたいと思う。その答えが見いだせた時はじめて、「倫理教育」なるものが目指すべきものが臆気

に浮かび上がるものと期待できるからである。なお、こうした問題は、通常は「倫理学」や「哲学」の範疇のものである。しかしここでは、それらの理論体系には十分に考察されているとは言い難い「倫理教育」の視点を重視し、「倫理性の発達」についての探求を試みてきた「心理学」の立場から、考えてみることにしたい。

表1 コールバーグの道徳性発達理論において想定される3つの道徳的水準

低道徳水準（前習慣的水準）	「苦痛」と「罰」を避けるために、道徳的振る舞いを行う段階。
中道徳水準（習慣的水準）	実際に存在する社会的な規範や法律に従うことを通じて、道徳的振る舞いを行う段階。
高道徳水準（後習慣的水準）	実際に存在する社会的な規範や法律に従うだけでなく、より普遍的な倫理的原理に基づき、自らの良心から非難を受けないようにすることで、道徳的振る舞いを行う段階。

注) コールバーグ理論では、上記の各3つの水準はさらに2つづつに細分化され、合計で6段階の道徳発達段階が存在することが想定されている。その名称は、より低次の段階から順に「1. 罰と服従への志向」「2. 道具主義的な相対主義志向」「3. 对人的同調」「4. 法と秩序志向」「5. 社会契約的な法律志向」「6. 普遍的な倫理的原理の志向」となっている。

道徳性の3水準

道徳性の発達理論において、心理学において広く採用されている代表的古典理論の一つは、「コールバーグの道徳性発達理論」²⁾である。この理論(以下、コールバーグ理論)では、人間の道徳意識には表1に示したような、「低次」から「高次」までの3つの段階が存在していることが想定されている。

まず、「低道徳水準」とは、「損か得か」の判断に基づいて道徳的な振る舞いをする段階である。例えば、「報酬をもらえるから」「罰を受けるのが怖いから」という理由で「倫理的行動」を為すような人は、「低道徳水準」にある。この段階にある人は、「処罰や報酬のシステム」がなければ、社会秩序を保つことなどできないと信ずる傾向が強い。

「中道徳水準」とは、集団(会社)や社会の法律や規範に基づいて道徳的振る舞いをする段階である。例えば、「そういう決まりだから」「そういう法律・ルールだから」という理由のみに基づいて「倫理的行動」を為す傾向が強い人は、「中道徳水準」にある。この段階の人々は、杓子定規に「法的コンプライアンス」を重視したり、「法律を守ってさえいれば何をやってもいいだろう」と考える傾向が強い。

最後に、「高道徳水準」とは、実際に存在する社会的な規範や法律というよりむしろ、より普遍的な倫理的原理に基づき、自らの良心から非難を受けないようにすることで倫理的行動をなそうとする段階である。日常用語でいうなら、「卑怯なことだけはすまい」と心に定め、「公のための我が使命とは何か」を日々思い悩む人々はこの段階にある。この段階の人は、場合によっては自らの良心にかけて会社や社会の法律をあえて破ることすら、そして、それによって処罰を受けることすらいとわない。

この様に、コールバーグ理論では、どの様な行動を行ったかという「行動の内容」をもってして倫理的であるか否かを判断するのではない。それ故、この理論に従うなら、先の例のS, T, Kのいずれが倫理的で非倫理的であるかは、先の記述だけでは判定できないのである。彼らの行動の「主観的理由付け」、

あるいは「その行動に至る彼らの思考プロセス」こそが、彼らが倫理的であるか否かを判定する唯一の基準となるのである。例えば担当者 S が、虚偽の需要予測が発覚した場合の処罰を恐れるが故に、真面目に需要予測をしようとしていただけなら、担当者 S の倫理性は低いと言わねばならない。逆に、行政の課長 T が、国家公共のための道路の必要性を信じ、そのために万やむを得ず虚偽の需要予測を求めているとするなら、課長 T の倫理性が低いとは必ずしも言えないのである。

道德性の発達

コールバーグ理論は以上の前提の下、人々の道德性の発達について、次のように想定する。

第一に、人々の道德性の発達は、一つずつ道德水準の階段をのぼることで、発達していくと考える。すなわち、低道德水準の個人がいきなり高道德水準に到達することはあり得ず、中道德水準にて自らの言動を律する期間が一定あった後に初めて高道德水準に達する可能性が生ずると考える。そして道德水準が一旦向上すれば、レベルが低下することはないと考える。

第二に、道德水準がより高次のレベルに上昇するためには、「認知能力」と「役割取得能力」が発達することが不可欠であると考え。ここに「認知能力」とは、知的水準を意味する能力であり、日常用語で言うところの「頭の良さ」に対応する能力である。一方で、「役割取得能力」とは、様々な対人関係において、他者の立場になって、他者の考えや気持ちを押し量り、かつ、その推察に基づいて当該の対人関係での自らの振る舞いを検討していく能力である。

このことは「知育」があってはじめて道德教育が可能となることを意味している。なぜなら、認知能力の低い個人は道德的に高次の水準に到達することができないからである。そして同様に、いくら「頭」がよくても、役割意識の無い人間は道德的に発達することが無いことも含意されている。それ故、様々な立場の人々と共に過ごすこと、そして、様々な立場を体験することは道德的発達において極めて重要なのである。

倫理教育が目指すもの

以上、コールバーグ理論について説明したが、この理論は、私たちに次の2つの重要な示唆を与えている。第一に、我々は、特定の行動をなしたということのみを以てして、その個人の倫理性の高低を断じてはならないということである。例えば、コールバーグ理論の見地に立つのなら、例えば「人助け」ですら倫理的な人助けと非倫理的な人助けが存在するのであり、同様にして「談合」ですら非倫理的な談合のみならず倫理的な談合が存在するのである。倫理的であるか否かを決するのは、なした行動の内実ではなく、それを導いた主観的理由付けの質なのである。

第二に、倫理教育の目標は特定の教理やルールを「覚え」それに「盲従」する態度を教え込むことではなく、より高い水準の道德段階への上昇に他ならない、という点である。そのためにも、例えば冒頭で示したような、道德的判断が難しい問題(一般に、こういう問題はコールバーグ理論では「モラル・ジレンマ」と言われる)を、擬似的にでも考える機会を設けていくことは、倫理教育において重要であろうと考え

られる。

以上がコールバーグ理論の見地からの技術者倫理教育に対する示唆である。無論、この理論が我々に有益であるか否かはその活用如何にかかっているものであり、一概にこの理論を金科玉条と捉えることなどできない。しかし少なくとも、この理論が「高水準道德」の段階にあると見なす人間像と、我々が伝え聞く様々な土木の先人達の姿とは、さして違いが無いように思われる。なぜなら、我々が伝え聞くところの土木の先人達の多くは、卑怯な振る舞いを断固として退け、真の公共とは何かを見定めつつ、そのためにいかなる貢献が可能であるのかを悩み続けた人々に違いないからである。そうであるのなら、その解釈理論の如何に関わらず、その精神を引き継ぐことこそが倫理教育が目指すべき根幹的目標であることを我々は忘れてはならないのであろう。本稿で紹介したコールバーグ理論の我々にとっての最大の理論的効用は、こうした当然の事実を再び我々に思い出させるところにあるのである。

【参考文献】

- 1)教育企画・人材育成委員会倫理教育小委員会(編)：技術は人なり、土木学会、2005.
- 2)Kohlberg, L. (1969) Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D.A. Goslin (Ed.) Handbook of socialization theory and research. Chicago: Rand McNally, pp. 347-480.